

5月総評 西躰かずよし

今月は、これまでからの書き手にあっては、新しい表現への模索が垣間見える作品が見られた。また、新たな才能を感じさせる書き手についても出会うことが出来た。自身の表現を訪ね歩くこと、そして書くこと。そのなかで分ることがあるに違いない。

遠雷

魚は

暗い海に

居る

長谷川柊香

宮城県

「踏青の果て朽ちている郵便車」といったこれまでの定型を軸とした作風から一変し、新たな表現への模索が感じられる。分かち書きを用いつつ、一切の余分な言葉は取り除かれている。同じ作者の「蝶に触れ／言葉の／ 鱗粉／ 風へ」「迷子に／なれない／街に／時雨」といった作品についても同様のことが言える。これらの作品は定型に拘泥せず、敢えて言葉を切り詰めることで、より緊張感のあるものとなっている。

裏門はわたしのために開かれて

窓から見える警備のひかり

豊富 瑞歩

茨城県

自身の体験が下敷きとなっているのだろうか。次にあげるような学校生活をモチーフにした一連の作品は印象深い。「学校を目の前にしてここからは／嘘ばかりが言葉になっていく」「卒業とともに校舎は閉ざされて／それでも光る廊下があった」「控えめな場所を選んだ寄せ書きの／似たひとばかり集まった場所」など。それらの表現からは、止むに止まれない思いに駆られて書かれたことが伝わってくる。

空がハーブを

弾いたなら

七色ぐもが

おんぷとなる

桜咲

千葉県

こうゆう作品に、解説は余分だと思うが、作者にとっては、空も雲も友達のようなものなのだろう。まど・みちおの世界にもつうじるような作風。他の作品「広告の文字／まとった／四月のたね」「雨だれが／予告もなしに／蚊に落ちる」についても同様で、読むことの楽

しさを思い出させてくれる。

シャンプーのゆびさき 星の
まんなかでひかりになっている
さがしてよ

白野 新潟県

この作者の他の作品には「中学の同級生がエンコウを／やめたらしい 電話線光る」「不織布をまっかな口紅でぬらして／話しつづけた星のこと 夜明け」のようなひりひりとした青春の断面を描いたものがある。痛ましさを感じさせるような断面。その根底には大切なもの（この作品では「シャンプーのゆびさき」だろう）を喪うまいとする作者の強い思いがあるのだろう。

安楽死させてください
音楽に生まれ変われる気が
するんです

まちりこ 埼玉県

安楽死の向こう側にある、音楽に生まれかわりたいという願いは、表現のありかたは異なるが、宮沢賢治の雨ニモ負ケズの「ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」という願いと、遠いところで繋がっているような気がする。

炭酸のはじける泡のひとつぶで
これからだってただのひとつぶ

翠 東京都

「ただのひとつぶ」という言い切りから、それ以上でも以下でもない自身をまっすぐに受けとめる作者の気持ちが伝わってくる。

二百個の手が繋がれて夏祭り

細村 星一郎 東京都

「梅雨の星／キリンの濡れた目のなかに」といった少年の感性を投影したような作品がこの作者には既にあるが、今回のものはこれまでの作風と少なからず変化している。第一に句からは既にへんてこな感じがにじみ出ている。第二にへんてこだけれども、なんだかおもしろい。そうしたへんてこさを口語で表現した嚆矢として、まず思い浮かぶのは坪内稔典（「三月の甘納豆のうふふふふ」など）であるが、実際に書くとなるととても難しいだろう。新たな困難にチャレンジする作者の姿勢を歓迎したい。